

県内酒蔵危機感

コメ高騰

コメ価格の高騰を受け、日本酒の原料となる酒造好適米(酒米)が値上がりしている。県内の酒蔵は、日本酒の販売価格への転嫁や生産量の減少を余儀なくされる事態に、危機感を募らせる。酒造関係者は「(商品の)値上げをすれば売れなくなる。値上げしなければ、ただで売っているようなものだ」と嘆く。

(市原萌子、玉田健太)
【関連記事2、5面に】



酒を仕込む蔵人。酒米の値上がりで今後は商品価格や生産量への影響が避けられない。9日、飛騨市古川町亨之町、渡辺酒造店

酒米農家、主食米に転作の恐れ 価格転嫁すれば日本酒離れも

「商品の値上げをせざるを得ない。仕込み自体を減らす同業者もいると聞いている」と苦しい現状を話すのは、県内屈指の日本酒の蔵元渡辺酒造店(飛騨市古川町)の渡邊久憲社長(56)。「ここ数年、燃料費や人件費の高騰で販売価格を上げてきた中で、酒米の価格上昇がさらに追い打ちをかける。」

飛騨地域で生産され、県を代表する酒米「ひだほまれ」も例外ではない。飛騨農業協同組合(JAひだ)が数日前に組合員向けに通知した内容によると、JAから農家に前払いする「概算金」は2025年産が60キログラム当たり2万3500円で、24年産から7千円の値上げとなった。25年産については全農岐阜と県酒造組合連合会が価格の協議を続けていたといい、組合側の窓口役を務める渡邊社長は「協議中にもかかわらず一方的な通知で、大変失礼だ。こんなことは初めて」と憤る。

酒米は主食用米と比較して面積当たりの収量が少ないものの、栽培に手間暇がかかり、一般的に主食用米より高値で取引されてきた。渡邊社長によると、県

産の一般米と酒米ではここ数年、酒米が60キログラム当たり1500〜2千円ほど高く取引されていたが、「令和の米騒動」で、24年産は一般米の一部が酒米の価格を追い越したという。

渡辺酒造店を取り扱う「蓬萊 蔵元の隠し酒」720ミリは、22年9月時点で1124円だったが、同年10月から1250円、24年10月から1345円と値上げが続いていた。渡邊社長は「さらに価格に転嫁すれば、日本酒以外の酒に顧客が流れてしまう可能性がある」と警戒する。

ことで、26年産の酒米確保への影響も懸念される。25年産の価格次第で、主食用米に転作する農家が増える可能性があるからだ。全国的には、そういった影響が出ている地域もあり、連合会関係者は「自県での酒米生産が少ない地域では、すでに今年の酒米が6割ほどしか確保できないという話も聞く。岐阜も来年以降がどうなるかは未知数」と明かす。

飛騨酒造組合理事長を務め、創業1720年の奥飛騨酒造(下呂市金山町)の高木千宏代表(68)は「(日本酒の価格を)高くすれば売れなくなるし、普段飲む酒の値段ではなくなってしまう」と困惑し、「こんな状況が続けば、廃業する酒蔵が増え、酒蔵は現状の半分ほどになってしまうのでは」と先行きを危惧する。